

1.1.2. メディア化した社会と墓参りの作法

問芝 志保

1. はじめに

スティ・ヤーヴァードは、文化や社会のメディア化 Mediatization との概念を用いて、文化や社会がメディアとその論理にますます依存するようになる過程を説明している [ヤーヴァード 2023]。確かに今や、我々を取り囲む、身近な衣食住から政治経済、医療衛生、教育、芸術、スポーツ、歴史地理など、ありとあらゆる領域がメディア情報と不可分には存在しえない。

それは宗教実践や、冠婚葬祭のような儀礼的慣習においても同様であろう。「メディア情報と葬儀の変容」というテーマでは、すでに山田慎也が冠婚葬祭作法書にみられる告別式の記述をたどることで、作法書が支配的言説となって告別式の全国的な均質化がもたらされたことを明らかにしている [山田 2017]。

それでは、墓参りについてはどうだろうか。一般には、墓参りの作法はメディア情報からの影響を受けているとは考えられていないように思われる。現行の墓参り作法は先祖から祖父母、父母、自分へと代々、何の足し引きもなく伝えられてきた伝統的なしきたりであるとの認識でいる人が多いのではないか。

ここで、葬儀と比較することで墓参りの作法の特質を考えてみたい。葬儀の場合、家や地域共同体が主体となって葬儀を運営していた時代には、その家や地域固有の規範的慣習の遵守と継承が求められた。しかし戦後になると葬儀を葬儀社が主導するようになり、葬儀における家や地域共同体の存在感が弱まった。特に都市部の葬儀では、各地方から人々が集まってきているため、普遍的なマナーが求められやすい。遺族・参列者としては、親戚・知人・会社関係者の視線にさらされるため、服装や香典の出し方、焼香の作法など、細部にわたるマナーから逸脱しないようふるまう。もちろん、死者を弔う儀礼としての規範意識も強く働く。こうして人々は、場合によってはマナー本などのメディアをとおして葬儀のマナーを学ぶ。

墓参りの場合も、近世以前から存する村落共有墓地や個人墓地、寺院墓地では、各共同体固有のしきたりを守るべきであった。それが明治期以降になると、都市部で公営霊園が設けられるようになり、戦後には全国的に民営霊園が普及する。霊園は不特定多数が使用するため、各事業者が公共使用のルールやマナーを定めた。

ただし、墓参りが葬儀と異なるのは、都市や郊外の霊園での墓参りはふつう家族や個人で行くものであり、しかも霊園の利用者は他人どうしでお互いに干渉しないため、葬儀ほどにはマナーを気にする必要がないことだろう。人に迷惑をかけるような公共的マナーの逸脱は許されないが、そうでない限りは、墓参り作法が多少自己流でも問題にならない。したがって、自家や個人の宗教的信念体系にもとづく自由な私的実践も可能である。

とはいっても、他の利用者の視線もあるため、あまりに奇異な行動はとりづらい。また、機会としては多くはないだろうが、亡き友人・知人・仕事関係の墓参りに複数名で行くこともありうる。やはり、非常識と見られないように標準的な作法を知っておきたいとのニーズはあるだろう。さらに、墓は一般に数十～数百万円と高額な買い物であることから、墓石を傷めない掃除や長持ちするような手入れの仕方の知識も求められよう。

以上のように、ひと口に墓参り作法といっても、そこには①家や地域共同体の伝統的しきたり、②迷惑をかけない公共的なマナー、③恥をかかない標準的な所作、④合理的な手入れ、⑤私的／宗教的实践という、5種の作法が含まれていると考えられる。

本稿は以上のような観点から、メディア化した日本社会のなかで墓参り作法のメディア情報がいかに展開され

人々を取り巻いているのか、それが人々の心情にどのような意味を持つのかを考察していきたい¹。具体的には、マスメディアのなかでも冠婚葬祭マナー本と霊能者・占い師本という性質の異なる2つのジャンルを取り上げ、それらの説く墓参り作法の特質や、それらと響き合う人々のニーズを検討する。加えて、2019年にSNSで生じた“墓の水かけ論争”を事例に、墓参り作法の多面性を浮き彫りにする。

2. 冠婚葬祭マナー本の墓参り作法

(1) 対象

日本ではこれまで多くの冠婚葬祭マナー本（以下、マナー本）が刊行されてきた。マナー本の記述は、人々が恥をかかない普遍的な作法を知るために読むというその性質上、著者の思想や観念を一方向的に啓蒙するというよりは、日本国内で一定程度、標準的とみなしうる内容が掲載されていると考えられる。岩下自身も、マナーは時代とともに変わると述べつつ、人の気持ちに配慮した「思いやり」として「先人たちが作ってくれた、いろいろな思いを持った多くの人が集まる冠婚葬祭の場でのマナーとルール」を身につけることを推奨している [岩下 2023b : 3]。したがってマナーとは守旧的であり、新しい慣習をすぐには掲載せず、明確に定着してはじめて掲載することとなろう。マナー本は刊行時点の日本社会で概ね共有された規範を反映しているとみなしてよい。記載内容の年代による変化を明らかにすることで、日本社会の規範の変化を明らかにしうると考えられる。ただし後述するように、いったんそれが書籍というマスメディアに掲載されれば、それが「正しい」作法としてのお墨付きを得た形となり、社会により普及・定着するという、相互規定性もあることが想定できる。

本稿は以下、岩下宣子²という人物の監修によるマナー本を対象とし、年代を経るごとに記述がどのように変化しているかを明らかにする。複数ではなく一人の監修者を取り上げるのは、その変遷をより明確にするためである³。1999年～2023年までに刊行された岩下監修のマナー本のうち、冠婚葬祭を表題に掲げたマナー本は19冊あった。そのうち、ページ数の少ない本やムック3冊では、先述のように墓参り作法の掲載優先度は低いようで、記載がなかった。その3冊を除外した以下の16冊を検討の対象とした。以下、本文中では、それぞれの書籍名を略し、刊行年によって示す。

¹ 墓参り作法を記した主な刊行物として、マナー本や霊能・占い本の他にも、宗教者（特に仏教僧侶）、宗教学者、石材業者による書籍がある。本稿は紙幅の都合上全てを扱えないが、宗教学者で浄土宗僧侶でもある藤井正雄の書籍を確認した限りでは、マナー本の記載とはほぼ同内容の墓参り作法が記されていたことを付記しておく [藤井 2002]。

² 岩下のプロフィールを各書籍の奥付の記載内容からまとめると、次のとおりである。1945年東京生まれ、共立女子短期大学卒業後、キッコーマン株式会社に入社した。30歳のとき、全日本作法会の内田宗輝、小笠原流小笠原清信のもとでマナーを学び、1985年、現代礼法研究所を設立した（主宰を経て現在は代表）。以降、「マナーデザイナー」の肩書で企業研修やマナー講座の講師を務め、講演活動やテレビ出演などを行っている。2004年にはNPO マナー教育サポート協会を設立した（理事長を経て現在は相談役）。岩下が著者・編者や監修者をつとめた書籍は冠婚葬祭の他、人付き合い・贈答の作法、接客・ビジネスマナー、子供へのマナー教育、敬語、手紙・スピーチ文の書き方、“女性の美しいしぐさ”等などに及び、50冊をゆうに超える。なお小笠原流とは室町時代の公家の有職故実の系譜をひく礼法で、江戸時代には武士の作法として定着、明治には学校教育にも取り入れられ、特に女子の礼法として広く用いられたという [加野 2014b : 28]。

³ 監修者である岩下の意向が、これらのマナー本の記載内容にどこまで正確に反映されているかは必ずしも定かではない。実際には岩下が直接執筆するのではなく、書籍の奥付に名前が挙げられた取材・執筆・編集担当者が、岩下監修のものを含め既存のマナー本等を参考にしながら構成・加筆修正して完成させていると思われる。それでも、そうした点は本稿の目的に照らして大きな問題とはならない。

岩下宣子 1999a 『困ったときに役立つ 慶弔事典』 日本文芸社
 おつきあい上手な若奥サマの集い(編)・岩下宣子(監修) 1999b 『ズボラな奥さんの花マル冠婚葬祭ガイド 一家に一冊!』 情報センター出版局
 岩下宣子(監修)2001a 『冠婚葬祭 恥をかかないマナー事典』 日本文芸社
 岩下宣子(監修)2001b 『カラー版 冠婚葬祭事典 結婚・葬儀・お祝い・年中行事・おつき合いとマナーのすべてがわかる』 ナツメ社
 岩下宣子(監修)2008 『イラストでわかりやすい 冠婚葬祭のしきたり・マナー事典』 ナツメ社
 岩下宣子(監修)2009 『冠婚葬祭マナーの便利帖 作法が身につく しきたりがわかる』 高橋書店
 岩下宣子・近藤珠實・篠田弥寿子(監修)2011 『くらしの冠婚葬祭とマナー』 新日本法規出版
 岩下宣子(監修)2013a 『冠婚葬祭しきたりとマナー事典 心が伝わる「きちんとマナー」がよくわかる』 主婦の友社
 岩下宣子(監修)2013b 『冠婚葬祭しきたりとマナーの事典 お付き合いの基本ルールがひと目でわかる!』 日本文芸社
 岩下宣子(監修)2014 『冠婚葬祭マナーオールガイド こんなときどうする? がきちんとわかる』 新星出版社
 岩下宣子(監修)2015 『冠婚葬祭「きちんとマナー」ハンドブック いつでもどこでも知りたいことのすべてがすぐわかる』 主婦の友社
 岩下宣子(監修)2016 『きちんと知っておきたい 大人の冠婚葬祭マナー新事典』 朝日新聞出版
 岩下宣子(監修)2020 『冠婚葬祭マナーの新常識 何が変わったの? with コロナ時代に対応!』 主婦の友社
 岩下宣子(監修)2022 『礼儀正しい人のための 冠婚葬祭「マナーとお金」最新ハンドブック』 主婦の友社
 岩下宣子(監修)2023a 『増補改訂版 きちんと知っておきたい 大人の冠婚葬祭マナー新事典』 朝日新聞出版
 岩下宣子(監修)2023b 『冠婚葬祭・年中行事のマナー大全』 成美堂出版

(2) マナー本の墓参り作法

実際に対象としたマナー本 16 冊における記載内容の一覧が表 1 である。

	墓参り作法の記載	墓参り作法の具体的内容											その他					
		墓石を掃除する	墓石の水気を拭く	雑草をとる	供水	供花	供物	ろうそく	線香	水をかける	故人と血縁が近い順に参る	低い姿勢で	合掌	供物を持ち帰る	墓参り代行	彼岸の墓参り	盆の墓参り	生前準備・終活での墓の選択
1999a 全 192 頁	○イ	○	—	—	—	○	○	—	○	○	—	—	○	○	—	○春秋	○	—
1999b 全 192 頁	○	○	—	—	—	○	○	○	○	○	—	—	○	—	—	○	—	—
2001a 全 304 頁	◎イ	○	—	—	○	○	○	—	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—
2001b 全 432 頁	○イ	○	—	○	—	○	○	—	○	○	○	×	○	—	—	○春	—	—
2008 全 256 頁	○イ	○	—	○	—	○	○	—	○	○	—	○	○	○	—	○春	—	—
2009 全 432 頁	○	○	—	○	—	○	○	—	○	○	○	×	—	○	—	○春秋	—	○※「自分の葬式・告別式」
2011 全 366 頁	○イ	○	—	○	—	○	—	○	○	○	○	×	○	—	△	◎春	—	○※エンディングノートのみ

的とまでは判断しにくい所作と位置づけられようか。

「供物を持ち帰る」記述は、2008・2009 に記載があり、いったん見られなくなった後、2016a 以降は必ず書かれるようになっていく。近年では多くの墓地で、鳥や動物、虫が集まることを嫌い、供物は持ち帰るべきことが規範化されつつあることの反映であろう。これは公共的マナーといえる。

また、初期の段階では彼岸に墓参りすべきとの規範が強かったが、しだいにそのウエイトが盆の方へと移行していることも指摘できる。社会における認識の変化を映し出しているのだろう。

最後に、生前準備・終活と墓の選択がマナーとされていることも指摘しておきたい。マナー本は基本的に、自家で葬儀を出す場合や、他家の葬儀に参列する場合のマナーを説く。しかしながら、自らの最期のあり方を考え、エンディングノートの書き方、財産分与、葬儀・墓、尊厳死・臓器提供の意思表示などをしておくべきことも、2009 の「自分の葬式・告別式」項からすでに謳われている。たとえば2016a「自分の最期について考えよう」項は「自分らしい幕引きができるように、まだ元気なうちから準備をはじめるとよいでしょう」としたうえで、「葬式の形式や墓への入り方を決めておきましょう。生前予約や、子孫に負担をかけない永代供養も増えています」、「数々の難題に対して、当事者の意志をはっきり明示しておきましょう」[岩下監修 2016a : 226] と勧めている。2016a・2023a (2016a の増補改訂版) は「終活」の語も使用し、6 ページを割いて詳しい内容を記している。岩下の提唱するマナーとは人への配慮や思いやりであるため、その観点からいえば、子孫への思いやりとしての終活がマナーに含まれることとなるのであろう。

(3) 小括

まずマナー本の全体の傾向として、出版年代が新しくなるにつれ、墓参り作法の分量は増え、記載内容も詳しくなっていることが指摘できる。このことは、今日の日本社会で守るべき公共的マナーの適用範囲が拡大し、規範意識が強まっていることの表れといえる。加野は、このようにマナーが拡大している背景は、日本のマナーが悪化したためではなく、むしろ人々がマナーに過敏になっているためだと述べる。そして人々がマナーに過敏になった理由としては、社会や対人関係が複雑化してコミュニケーション能力が求められるため、人々の自尊心の肥大と市場化により消費者を不快にさせないことが重視されるため、そしてたとえばタバコの臭いのように、人々が不快を感じる範囲・領域がかつてよりも拡大しているため、の3つを挙げている [加野 2014b : 61]。そうだとすれば、人々は社会のなかで拡大し増加するマナーを随時新たに学ぶ必要があり、新しいマナーという規範からの逸脱者に対する批判的まなざしを恐れるようになるだろう。その恐れや不安が、今日におけるマナー本や、インターネット、SNS での情報を増加させていると考えられる。そしてマナー情報の氾濫はまたいっそう守るべきマナーの数を増やし、規範性を高め、人々の不安を喚起するという循環が生み出されているといえよう。

さてマナー本における墓参り作法には、冒頭で挙げた5種のうち、合理的手入れ方法(墓石を掃除する、墓石の水気を拭く)、公共的マナー(雑草をとる、供物を持ち帰る)、標準的所作(供水、供花、供物、ろうそく、線香、水をかける、故人と血縁が近い順に参る、低い姿勢で、合掌)の3種が含まれているといえる。共同体的しきたりや私的/宗教的実践とみなしうるものは、マナー本の性質上当然ながら含まれていない。

3. 霊能者・占い師の説く墓参り作法

続いて、テレビなどのメディア出演を行ってきた霊能者・占い師がどのように墓参り作法を説いてきたのかを見ていく。テレビ番組の映像資料の入手が困難であるため、次の書籍を資料とする。

宜保愛子 1986 『幸せを招く 先祖霊の祀り方』日東書院
細木数子 1985 『運命を開く 先祖のまつり方』世界文化社
細木数子 2003 『幸せになるための 先祖の祀り方』KK ベストセラーズ
細木数子・細木かおり 2018 『新版 幸せになるための 先祖の祀り方』飛鳥新社
橋本京明 2014 『呪いを祓う 55 の方法』宝島社
橋本京明 2018 『神さまに愛される 本当に願いが叶うお参り』辰巳出版

(1) 宜保愛子

第一に宜保愛子⁵ (1932-2003) の『幸せを招く 先祖霊の祀り方』(1986) を検討する。宜保は同書で、自身の霊能によって得られた「仏様のメッセージを伝える義務がある」との動機から、「仏さまはどのような供養を求めているか」を記したという [宜保 1986 : 2-4]。宜保の説く世界観の大要を述べると、霊魂は不滅であり、次の世にはまた姿を変えて転生してくるが、霊界・地獄にさまよっている不成仏霊は霊障を起こすため供養をすべきという。

その世界観をより詳細にまとめておこう。宜保によれば、死者の霊は死後四十九日間、家の近くをさまよっており、この間に霊界に向かうか地獄におちるかが決められる。霊界とは決して楽園のようなところではなく、成仏し、得度し、再びこの世に転生してくるまでの何百～何千年を過ごす、長い苦しみが連続する世界である。生前に良い行ないをしていたり、生者から十分な供養を受ければ、霊界のなかでもより苦悩の少ない世界に身を置くことができ、成仏も早い [同 : 191]。しかし成仏していない仏様すなわち不成仏霊は、霊界でもがき苦しむ。地獄はさらに苦しい「泥沼のへドロの暗闇」である [同 : 83]。家庭のなかに起こる災厄は、不成仏霊が頼ってきて、早く成仏させてほしいと訴えていることによる [同 : 24]。特に自殺者や水死・焼死者、その他「残酷で悲惨な亡くなり方をした人の霊はなかなか成仏しにくく、さらに十分な供養をしてもらえない場合に霊障となって表れてくるのです」と宜保はいう [同 : 120-121] ⁶。

そこで「悪因縁をもたらす不成仏霊を、供養によって一秒でも早く成仏させてあげること」[同 : 3] が生者の務めである。霊を供養することで、その成仏・輪廻転生までの期間を短縮できる。また、地獄にいる霊を霊界へと導くこともできる [同 : 2-3, 83]。供養とは「苦悩のどろ沼」のなかから「引っぱりあげてやること」である。「仏の道へ早く行きなさい。早く成仏し得度をして再びこの世に戻っていらっしやい」と呼び掛けて力を与えてやる――。これが供養であり、生きている人の務めだと思うのです」と宜保はいう [同 : 12-18, 24]。

この世界観のもとで、宜保は墓を「この世に生命を得たひとつの証拠」であり、「霊の安らぐ場所」、そして「仏様とのコミュニケーションの場」と位置づける。そして墓の「正しい祀り方」として次のような自説を語る。墓の周りを掃除し、雑草を抜き、花立てに花を挿す。墓石に水をかけるときは「ダーッと前方から沢山浴びせることをせず後の方から静かに、静かにそっとかけてあげます。何杯も何杯もかけないことです。たとえば、三人で墓参したときは三人それぞれに、ひしゃくに半分くらいの水の量で十分です。水は花にも注いでやり、そ

⁵ 宜保は「霊能者」を自称し、1970年代中頃～1990年代にかけて多数のテレビ出演や講演、書籍刊行等を行った。昭和のテレビ霊能者を代表する一人であった。

⁶ 自殺霊が最も成仏しにくいなどと説くことは遺族に対してあまりに非情に思われるが、宜保の意図は苦しむ人が自殺という選択をすることの抑制にあることは付記しておく。宜保は繰り返し、死後の霊界は非常に厳しく、現世に生きることがどれほど苦しくても霊界よりは楽だとし、「現世よりもはるかに苦しい世界にあえて行くのだということを認識すれば自殺はできないはずです」[宜保 1989 : 21] と述べている。

れでも余るならば隣の墓にもかけてあげます。向う三軒両隣の供養にもなります」。線香と、生前の好物などを供える。墓の片隅に無縁仏のための線香を一本立てるとよい。座って合掌する。すぐに去らず、「何分間か一緒にいてあげることです」。願い事をしてもいいが、愚痴ったり罵ったりしてはいけない。「南無阿弥陀仏」か「南無妙法蓮華經」の言葉を何回も唱えれば、長いお経を唱えたと同じ効果がある [同：125-130]。

ちなみに建墓や納骨についても、黒っぽい墓石はなるべく避ける、もし一つの墓に親類縁者を入れるならば全員を入れるべきであり、たとえば5人兄弟のうち2名のみを同じ墓に入れて3名を仲間外れにしてはならないといった独自説を記している。特に、分骨、骨壺に生前の愛用品などを入れること、動物と一緒に埋葬すること、遺骨を家に置いておくことは、いずれも霊を苦しめるためタブーだと厳しく戒めている [同：87-91、119、125-138]。

(2) 細木数子

続いて^{ほそきかずこ}細木数子⁷ (1938-2021) の言説を検討する。細木は自称の肩書として「六星占術」を使用しており、「超能力者や霊能師」ではないと書いている [細木 2003：4]。細木によれば、1980年に初めて先祖供養をテーマとした著書（筆者は未見である）を刊行して以来、先祖供養の相談を受けて新しいケースに遭遇するたびに「私も真剣に調べをおこない、そのケースにもっともふさわしい先祖供養の方法を編み出し」た [同：5]。それらをまとめて決定版として刊行したのが2003年の『幸せになるための 先祖の祀り方』だという。2003年はちょうど細木のテレビ出演が非常に増えた時期であった。

なお細木による「調べ」の詳細は、本書中に明言はされていないが、本文中に「統計的に」などの言葉が散見されることから、独自の量的データを根拠として因果関係を説いているものと考えられる。これは戦後の墓相学者や占い師にしばしば共通する特徴である。

細木が説く世界観は、陰陽思想を基本とするが、日本の家観念や宇宙神なども含めたさまざまな要素が、あれもこれもと複合されていく。ここではそれらの羅列・詳説は避け、先祖供養と墓にかかわることを要約する。

細木は、社会の中心は「家」であり、家を成り立たせているのが先祖供養だという。「人間として守らなければならない、いちばん基本的な約束事——それが先祖供養」であり、そうした「自然界の道理」に反すると、人生にトラブルが起こる。人は「宿命」を先祖から受け継いでいる。「親の因果が子に報い」というように、祖父母や両親の代が行った罪悪ことの報いが宿命として、子孫に災厄、不幸、苦しみが起こる。そうした災厄は六星占術でいる大殺界や中殺界のときに起こりやすい。宿命に原因がある以上、その因縁を断ち切り、因果の流れを変えることによってしか、悩み苦しみを根本から解決することはできない。その唯一の方法が先祖供養だと、細木は断ずる [同：39-43、50-51]。

先祖供養が形になったものが墓や仏壇だという。「幸せの基礎、一家繁栄の基礎は、先祖供養=お墓にあります」。墓とは「先祖の霊が安らかに眠るところ」であり、「家が続いていることにより、あなた自身もそうして連綿と続く〇〇家の一員であることを自覚し、それをさらに後世にもつないでいくことの重要性を認識する場」でもあって、子供にも伝えていくことが大切だとする。子孫が熱心に供養すれば、先祖は子孫を加護する。しかし墓参りに何年も行っていないなど、「ないがしろにされている先祖」は、子孫に「いたずら」をし、「自分たちを供養してくれ」という警告を発する。しかも先祖供養は、「すべて正しくおこなわなければ、実は意味を持たない」。先祖供養が不十分だったり、やり方が誤っていたりすると起こる災厄として細木は、子供の非行（飲酒、

⁷ 細木数子はもともと飲食店や会社を経営する事業家であったが、1982年から独自に編み出したという六星占術、および先祖供養や墓相学に関する本の出版を始め、占い師兼墓相家となった。2003年頃より数々のテレビ番組に出演するなどして注目を集めた。しかし、2008年頃にはテレビ出演はなくなった。

喫煙、シンナー吸引、家庭内暴力、盛り場を徘徊)、子供の問題(不登校、いじめ、引きこもり、障害、病気)、家庭内の問題(夫が不倫、家に帰ってこない、アルコール依存、暴力、遺産相続争い、嫁姑の不仲)、家族の健康問題(末期がん、病がち)、交通事故、貧しさ、失業、学校・職場での人間関係が悪い、男運が悪い、子宝に恵まれない、を挙げている[同:66-67、70]。

以上は本人が「決定版」と称した2003年の著書から引用したが、具体的な墓参りの作法については、1985年・2003年・2018年と時系列でその変化を追ってみたい⁸。

まず1985年の著書で示される「正しいお墓参りの作法」は次のとおりである。まず墓地に行ったら、寺院墓地の場合は本堂、六体地藏、無縁仏をお参りしてから自家の墓に行く。墓前に手を合わせ、五輪塔・両親の墓の順で、墓石をきれいに洗い清め、修理すべきところがないか点検する。墓地内を清掃する。線香と花を供え、合掌する。故人が生前好んだ食べ物を墓前に供えたり、お酒を墓石にかけてあげてもよい。灯明は故人の霊を導き、暖を与えるありがたいもので、必ずあげる。そのために墓地内にロウソク立てや灯籠を設置すべきである。そして、臨終の際に末期の水をふくませることからも、「お墓にはたつぷりと水をかけて汚れを洗い清め、苔やほこりを取り去って清潔にしてあげてください」。墓参りは家族総出で、それも命日や盆、彼岸にこだわらずできるだけ多く、月1回は行くべきである。何かのついでに行くのはいけない[細木1985:126-149]。

それが2003年になると、次の5点に変化がみられる。①墓の手入れについて、具体的に、スポンジにたつぷりと水をふくませて墓石を磨き、タオルで拭きあげるべきと記している。②水をかける記述が無くなっており、かけるともかけないと記載がない。③飲食物について、墓石に酒をかけると「墓石にシミがつきます。するとあなたの皮膚がシミだらけになってしまいます」、また故人の好きな食べ物を供えることは「ご先祖様を物乞い扱いするのと同じですから、厳につつしんでください」と、正反対の記述に変化している。④散骨や納骨堂では良くないことが起こるとして厳しく禁じている。⑤報恩感謝と成仏の願いを旨とし、現世利益を求めてはお願いごとをしてはいけないと新たに記している[細木2003:130-143]。

2018年⁹の著書を見ると、2003年から2点で変化がある。前出①について、より掃除の説明が詳細になり、専用のブラシや刷毛などで隅々やくぼみまで丁寧に汚れを落とし、最後に乾いた布で拭き上げるなどがある。また②については「ひしゃくで水をかけるのは厳禁。これは先祖に対しても失礼な行為です」との説明がある。この点は1985年と比べれば正反対に変化している。③⑤は2003年と変更はない。④も変更はないが、樹木葬も散骨と本質的に同じであると、また室内墓、マンション形式のお墓を“お墓もどき”と呼んで絶対に避けるべきとしている[細木ら2018:178-189]。

(3) 橋本京明

最後に「ラスト陰陽師」を自称する橋本京明¹⁰(生年不明)なる人物の著書を見ていく。筆者はかつてスピリチュアル本50冊における墓参り言説を蒐集したが[問芝2020]、その際に最も独自色の強い墓参りの作法説を記

⁸ なお、細木の著書では、墓参りよりも「正しい」建墓の仕方についての方が、記述量が多い。これは概ね、いわゆる墓相学における墓の大きさや色、形、状態が家運に影響するとの説の踏襲である。本稿は墓参りに絞り、扱わない。

⁹ 細木が高齢になったためであろう、細木の後継者で養子の細木かおりとの二人の共著となっている。構成や内容としては2003年と概ね同様だが、全体に時代に合わせた微修正が施されている。

¹⁰ 橋本によれば「神官の家系に生まれ、祖父が陰陽師である」[橋本2018:124]。幼い頃から念視・予知などの霊能を発揮し、8歳から四柱推命など数々の占いを学び、金峯山寺や比叡山行院での修行歴もあるという。「陰陽道や占術、占いという統計学、そして天授の霊能力をもとにした鑑定」を行ない、これまでに個人鑑定を行った数は1万人を超えるという[同:8]。なお、いずれも本人が公表しているものであり真偽は定かでない。橋本はテレビ等のメディア出演歴もある他、公式ホームページ、SNS、YouTubeチャンネル等で活動している。3月12日時点でのフォロワー数はXが2.2万、Instagramが2.3万であった。

していたため、本稿でも取り上げることにした。

橋本は2014でも2018でも、自身の宗教的世界観の全体像や言説の根拠については記していない。ともかく橋本は、2014では「呪い」を解くための「すぐにできる陰陽術の印や真言、呪い祓いの方法や知恵」を、2018では神社仏閣や墓参りの「正しいお参りの作法」を記している。たとえば神社参拝では帰り際に参道で後ろを振り返ると十分な現世利益を受けられない、賽銭は願い事をする際ではなく叶った後のお礼参りの際に、白いお金（1円、50円、100円）を12枚納める、といった独自の実践内容が多数列挙されている。

墓参りについて2014では、しっかり墓参りしていれば先祖は子孫繁栄を助けてくれるが、「先祖代々のお墓を粗末に扱くと、結婚運と金運に悪影響」が出て「一族を途絶えさせてしまう呪いにかかってしまうかもしれません」と述べる。婚活がうまくいかない人の墓は骨壺がいっぱいになっていることが多く、整理すると途端に縁談がくる。墓参りの手順としては、まず水道水で墓石を手のひらで撫でて磨き、その後「いい水を飲んでいただくために」2リットルのペットボトルの天然水を墓の上からシャワーのようにかける。墓石は個人の顔だと思って接する。新品のタオルで拭き、花と線香をあげて参る [橋本2014：88-89]。

2018でも橋本は「墓参りをしない人には幸せが訪れない」といい、墓参りを習慣にすればより強い力で守ってもらえるので必然的に運氣も上がると述べる。そして、2014よりも詳しく、次のような「お墓参りの正しい手順と作法」を示している。まず霊園の敷地内に入るときと自家の墓地区画に入るときとに、それぞれ一度ずつ合掌する。墓石は素手で掃除する。手の汚れを水で洗い流し、さらに持参したワンカップ酒（ラベルは外しておく）の1/3ほどを両手にかけて流して清める。ワンカップ酒のもう1/3ほどを墓の敷地内に注ぐ。そして持参した天然水2リットルを「墓石の頭のほうからかけ流します。墓石は故人の体そのもの。シャワーで清めるように、2リットル分をたっぷり流してください」。新品の白いタオルで墓石の水気を拭き取る。水、御食（食べ物）、花を供える。灯籠またはロウソクに火を灯す。その火で線香をあげる。合掌し、感謝や近況報告、願い事を伝える。墓前で供物の食べ物を食べる。ワンカップ酒の残り1/3は、自宅まで持ち帰って帰宅後すぐに台所へ流す。これで墓参りは完了だという [同：22-27]。ワンカップ酒・供物・灯籠使用の要素が新たに加わっている。

また橋本は、「金運アップには、お墓参りがもっとも効果的」として、特に入り口付近をほうきやスポンジで徹底的に掃除することを勧めている。さらに神社の御朱印を実家のお墓の敷地内の右奥に埋めると仕事運が向上し、入口両脇に埋めると健康運が向上するともある [同：37、108]。

他にも、必ず水を供えるべきこと（死者はのどが渇くため）、他人の墓の敷地に入ってはならないこと（霊に憑かれるため）、スマートフォンやゲーム機などは持ち込まないか電源をオフにするべきこと（電波に霊が集まりやすいため）、むやみに騒いだり玩具などで音を出してはならないこと（霊を刺激しないため）、ペットを散歩させてはいけないこと（霊の影響が出るため）、を挙げている [同：30-31]。

（4）小括

霊能者・占い師として名をはせる3名の説く墓参りの作法を確認してきた。いずれも概して標準的所作と重なる作法が多いが、それらの宗教的な意味が説かれていたり、あるいは特定の宗教的理由を付して禁止事項を設定したりするものとなっている。細木などは、かつて自身が推奨していた墓への水かけを、後年では厳禁とするように、経年変化もありうるようである。

根拠が霊能であるにせよ独自の統計であるにせよ、正しく供養すれば幸福になる、誤っていれば必ず不幸になるとの言説は、従来の標準的所作に不十分さを感じていたり、現状の自家・自己をとりまく状況に不安を感じていたりして、宗教的に「正しい」墓参りを追究する人にとって心強いものであろう。一方で、これまで共同体的しきたりや標準的所作だと思って行ってきたことを否定する、脅迫的な言説を受け入れられない人は多いだろう。そ

のように全く信じない人もいれば、多少気にする人も、そして完全に信奉する人もおり、反応には幅があると考えられる。特に宜保や細木クラスの著名人の場合、その信奉者が仮にわずか数%発生するだけでも数十万人にもなることになる。実際の墓参り作法のなかでも、このようなメディア情報に促されたり、あるいは自ら考案したりして実施する独自性の高い要素は、私的／宗教的实践と位置づけられる。

ところで、3 番目に挙げた橋本の知名度は、全盛期の宜保と細木に比べれば大きな差がある。筆者の理解では、橋本は多数存在するスピリチュアル系 YouTuber の一人で、そのなかでは比較的著名という程度にすぎない。橋本の信奉者が実際に何名いるかは不明である。だが、ここで強調したいのは、少なくとも我々の身近なところが、橋本が説くような独自の墓参り作法の情報であふれているという事実である。しかもその情報に触れるのは、何も能動的に、書店で墓参りの作法の書籍を探し求めたり、インターネットで検索したりする者に限らない。無目的にテレビやネットニュース、SNS を眺めている際に、あるいは知人親戚との雑談のなかで、意図せずこうした情報に触れることがある。もちろん全く気にとめない人も多いだろうが、ふと気になって能動的な探求に移ることもありうるのである。

4. 2019 年の SNS における“墓の水かけ論争”

今述べたように、メディアには墓参り作法言説があふれている。しかし冒頭で述べたように、それでも私たちは現行の墓参り作法は家のしきたりだと認識しており、メディアの影響などは受けていないと思っている。こうした状況をどのようにとらえることができるだろうか。その検討のために、次の事例を考察してみたい。

2019 年 8 月 13 日、TBS の情報バラエティ番組「この差って何ですか？」に一人の日蓮宗僧侶が登場して「お墓参りの作法」を語った。そのなかで僧侶は、墓は先祖の体そのものと考えられるため、「墓の上から水をかける」ことは先祖の頭から水をかけることになり「ふさわしくない」と述べた¹¹。標準的所作を否定するこのメディア情報に対して、複数の視聴者が Twitter¹²（現 X）で驚きや疑問の声を投稿し、翌 14 日には東京都のある葬儀社の代表取締役が次のように投稿した。

墓に水をかけちゃいけないってテレビでやってたみたいだけど、掃除だからアレ。墓に上から水をかけちゃいけないってのは細木数子が言い出したトンデモマナーで、そんなこと仏教的でもなんでもないから、みんな墓はキレイにしてあげていいよ。葬儀屋のおじさんが保証する。（@satonobuaki 2019 年 8 月 14 日）

これは、「水をかけてはいけない」説が占い師の唱える宗教言説にすぎないと暴露し、「水をかける」ことが標準的所作かつ合理的手入れだと反論する投稿として位置づけられよう。この投稿は、投稿者本人によれば「過去最高」数の反響を得た。2024 年 3 月 31 日現在、実に 12 万件もの「いいね」がついている。この投稿に対しては賛同の意を示す多数のコメントが付いた。その内容は、占い師やテレビが新たな「トンデモマナー」を生み出しがちな傾向に対する非難や、水をかけてはいけないなど聞いたこともない、祖父母から水をかける意義を聞いて

¹¹ 他にもこの僧侶は、墓石をタワシで磨くべきでない、目を閉じてお参りするべきでない、供花としてヒガンバナ・スイセン・ツバキは使うべきでない、供花にトゲがあれば取るべき、酒を供える場合にはフタをとるべき、といった墓参り作法を説いたが、これらは Twitter ではさほど話題にならなかった。

¹² <https://twitter.com/satonobuaki/status/1161325228108046336>。本稿では以下、2024 年 3 月 31 日時点での X に残された情報をもとにし、また原文ママにて引用している。

ていた、今までやっていたことなので安心した、墓参りは気持ちが良いだ、といったものであった。

ただし、少数ながら投稿者への異論と位置づけるコメントも付いている。「我が家はなぜか昔から濡れたタオルで身体を拭くようにお墓をきれいにしていますが…水をかけたほうがいいですか？」(@hana_leciel_33 2019年8月14日)とのコメントに対して、この投稿者は「墓参りは文化風習ですから、しきたりがあるならしきたりのとおりにやればいいですよ」「要は墓がキレイになるのが大事なんです」と返答し、論を微修正している。

そもそも、投稿者は「水をかけてはいけない」説は古い師の細木数子が「言い出した」と述べているが、実際に誰が「言い出した」のかという初出を特定することは不可能である。前節で見たように、確かに細木は2018年本で水かけを厳禁としているが、2003年本の時点ではむしろ水かけを推奨していたことは指摘しておきたい。また、コメントのなかには、石材店から、石が割れる恐れがあるとの理由で「水をかけてはいけない」と指導されたとの証言も複数見られる。また、墓地の水はけや狭小など立地上の問題で、水かけを禁止している墓地があることもわかる。「水をかけてはいけない」が実は合理的手入れとされる可能性も明るみになっている。

自分は石材屋さんから『お盆時期等の暑い日には、割れの原因になるので、水は掛けないで欲しい』と言われましたが。なので、家では普段から濡れたタオルで拭き清める事にしています。現に、普段から水をたっぷり掛けていた墓地のお隣さんは、割れが発生しています。(@DemioMidorino 2019年8月14日)

お墓に水をかけちゃいけない霊園もあるみたいですね。(@cbr250r_green 2019年8月14日)

次のようなコメントからは、テレビ番組に出演していた僧侶による「水をかけてはいけない」説に同調する人や、お盆前の放映だったことからすぐに僧侶の「水をかけてはいけない」説を実践し、かつ家族親族に説く人もいることがわかる。

お坊様が「御先祖に頭から水をかけるのは失礼」みたいなことをテレビで言われてましたよ！？ごもっともだなんて私は納得しましたけどね！お坊様のお話に。雨と掛水を一緒にするのはどーかと(^_^)
(@reiko19760907 2019年8月14日)

まさに「墓石の上から水をかけるのは、霊の頭から水をかけているのと同じらしいからやめよう」って親戚のおじさんに言われて…。その番組を観てたんですね。(@sharon_shanonn3 2019年8月15日)

さらに次のように、かつて細木がテレビ番組で説いた「水をかけてはいけない」などのさまざまな説を信じて実践し、家族親族にも促してきた人もいることがわかる。なお後述するように、細木のテレビ番組レギュラー出演は2003～2008年であった。

おねえちゃんが細木数子の信者だったので、一時期コレを真に受けていた。「亡くなった人の頭から水をぶっかけるとは何事だ！自分が同じことされたらどう思う!？」と。(@nnfnfnnameco 2022年8月14日)

当時は細木数子のせいでくずかごがお墓拭くためだけに使われた新品のタオルが大量に捨てられてました。(@Vin_nob 2019年8月15日)

これも若い人に浸透してるよ。うちの子に言われたもん（笑）誰に吹き込まれたか知らんけどw
(@Ryoshin555 2019年8月15日)

親戚に必ずいる仏事にやたらウルサイばーさんがお墓の上から水掛けるなどか言ってたなー。(@kay_org
2019年8月16日)

以上の“墓の水かけ論争”からも、日本の墓や墓参りをめぐる言説は、必ずしも全てが家のしきたりの伝承や共同体的慣習や権威的宗教教団にもとづくものではないことは明らかである。メディア情報を信奉して実践したり、それを自らが周囲に流布したりする人もいる。しかし、それが公共的マナーや標準的所作、合理的手入れに相反する場合、そのメディア情報を「トンデモ」と切り捨てる人も少なくない。

特に、常にマスメディアの言説を監視し批評している SNS 界隈では、人々は自らがこれまで行ってきた墓参りを「正しい」と肯定してくれる方の説に同調する傾向があることを、本事例は示していよう。この点に関しては、自己啓発本を調査した牧野智和の分析が参考になる。牧野によれば、自己啓発本の読者はその記述をそのまま全て真に受けるわけではなく、むしろ「使えるところ」を「発掘」するように、「自分で読んで解釈して、これだったらやれるかなぐらいな感じで」、「一定の距離を置かたちで、選択的・解釈的に」、そして「今の自分が正しいかどうかを確かめるために」読んでいる。牧野はこれを「自己確認的読み」と呼ぶ [牧野 2015 : 40-41]。これは自己啓発本のみならずメディア情報全般に言えることであろう。人々は自己の正しさを確認するためにメディア情報を使うことがある。

5. まとめ——不安を解消したい私たち

最後に、人々の不安の解消という観点から、墓参り作法のメディア情報を整理してまとめとしたい。

冠婚葬祭マナー本は、人々は公共的マナーや標準的所作、合理的手入れという面での、「正しい」墓参り作法を知りたいというニーズに応えるものである。

霊能・占い本も、「正しい」墓参り作法を知りたいとのニーズに応えるものとなっている点は同様である。ただし、それはたとえば、実は現行のやり方は誤っていて霊の祟りをもたらしめているのではないかと、先祖からの現世利益を十分に享受できていないかもしれないといった不安と結びついている点が、マナー本と異なる。それらの不安を抱えた人々にとっては、霊能者や占い師が、従来の標準的所作は誤りだと強く否定し、彼らの自説である「正しい」宗教実践をその意味とともに知ることによって、安心が得られるだろう。

もちろん、墓参りは死者を弔う宗教的实践である以上、グルメやファッション情報とは異なり、すぐに人々が新奇な情報に飛びつくわけではない。メディア情報と自らをとりまいてきたしきたりとを照らし合わせ、取捨選択すると考えられる。霊能・占い本の読者の多くも、自分の考えが「正しい」ことを確認したり、新たな意味を付加して安心したり、自分の信念と相容れない部分は除いて共感・納得する箇所だけを選択的に拾い読みしながら、私事化された私的／宗教的实践をつくりあげることが可能である。

そうした観点からいうと、先述した SNS における墓の水かけ論争は、人々が自己の行ってきた実践が公共的・標準的・合理的にも「正しい」ものだと確認したいとのニーズをもっていることの表れととらえられる。テレビというマスメディアで自家のしきたりが否定されて不安になった際に、SNS でメディア情報の方が誤りだとコメン

トして共感し合い、自分の正しさが確認されると安心する。伝統的しきたり、公共的マナー、標準的な所作や合理的手入れ方法、そして私的／宗教的实践と、墓参り作法にはさまざまな面があり、そこにこそ墓の水かけ論争が生じる余地があったのだろう。

以上のように、さまざまな主体がさまざまに墓参り作法を語っているメディア空間は、実は墓参りをめぐる多様な情報に満ちている。しかし、冒頭でも述べたように、私たちは、墓参り作法は家や地域のしきたりとして連綿と続いているものかと思っており、何か問題や疑義が生じない限りでは、私たちはそれが「正しい」と信じて疑わない。そうした現状肯定的・自己確認的な力が強くはたらくため、平常時はメディア情報の影響を受けない。しかし、何かのきっかけでそれが揺るがされ、不安を感じたりすると、その不安に応じてくれるメディア情報が、私たちを待ち構えている。現代日本の墓参り作法は、このようなメディア化した社会のうえに存在しているのである。

参考文献（分析対象本は除く）

- 加野芳正 2014 「現代社会におけるマナーの諸相」加野芳正編著『マナーと作法の社会学』東信堂
- 問芝志保 2020 「二〇一〇年代のスピリチュアル市場における先祖供養と墓参り」山中弘『現代宗教とスピリチュアル・マーケット』弘文堂
- 藤井正雄 2002 『お墓と埋葬の手帳——お墓に関することがすべてわかる』小学館
- 牧野智和 2015 『日常に侵入する自己啓発——生き方・手帳術・片づけ』勁草書房
- スティ・ヤーヴァード、津田正太郎訳 2023 (2013) 『メディア化理論入門——政治から遊びまで』勁草書房
- 山田慎也 2017 「告別式の平準化と作法書」『国立歴史民俗博物館研究報告』205